

令和元年6月26日現在

機関番号：37402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16858

研究課題名（和文）近代英語期における近接未来表現カテゴリーの創発に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical research on the emergence of the category of immediate future expressions in Modern English

研究代表者

渡辺 拓人（Watanabe, Takuto）

熊本学園大学・外国語学部・講師

研究者番号：00734477

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代英語期における近接未来表現カテゴリーの創発に関わる問題を扱った。初期近代英語で用いられていた様々な表現のうち、あるものは現代まで残り、あるものは残らなかった。本研究は、残ったものと残らなかったものの違いを検討し、形式や意味の面での安定性が各表現の命運を左右した可能性を指摘した。また、on the point of doingの異形態の交替を扱い、of doingで終わる現在の形が定着した背景には複合前置詞の発達があるとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近代英語期における未来表現の変遷を、近接未来表現という新たなカテゴリーの創発という観点から捉える点に意義がある。従来、英語未来表現の発達に関する研究は、will/shallの交替とその規範文法との関係や、be going toのような個々の表現の発達など、局所的側面に注目したものが多く、全体的視点から捉える試みはほとんどなされてこなかった。しかし、本研究の考え方により、過去数百年間に生じた未来表現の発達や変遷を、散発的・個別的な現象としてではなく、体系的変化として捉え直すことができる。

研究成果の概要（英文）：This study dealt with issues related to the emergence of the category of immediate future expressions in Modern English. In Early Modern English, there were various expressions to denote immediate future, some of which survived into today's English, but others died out. This study considered differences between those survived and those did not and suggested the possibility that the stability in form and meaning determined the fate of each immediate future expression in Early Modern English. It also dealt with the variant forms of "on the point of doing" and suggested that the current form ending with "of doing" was established due to the development of complex prepositions.

研究分野：英語学

キーワード：英語史 未来表現 近代英語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語の未来表現は、通時・共時、理論・実証を問わず、多種多様な方面から研究対象になっている。近代英語期における通時的・実証的研究に限っても、多数の論考が蓄積されており、最近の2-3世紀の間にも様々な変化が生じていることが明らかにされている。そのような研究には、たとえば、will と shall の交替 (引用文献)、be going to の文法化 (引用文献) といった個々の表現に注目したものの、これらの表現に加えて進行形や 'll など他の形式との比較を行い、より包括的視点から捉えようとしたもの (引用文献) などが含まれる。近代英語期には、be going to, be about to といった近接未来を表すことに特化した表現が定着したことも明らかにされている (引用文献)。

加えて、未来表現の発達を扱う際に近接未来表現を加える必要性は古くから言及されている (引用文献)。近年でも、近代英語期に様々な未来表現が出現したことは、簡単なコメントレベルであっても、様々な文脈で示唆される。

このような先行研究を踏まえると、英語未来表現の史的研究に取り組む際、いくつかの代表的な表現にとどまらず、多くの表現を対象にすることでより包括的な記述が行えること、また、近接未来表現が誕生し定着した近代英語期は、英語未来表現の史的発達において重要な時期であることが分かる。そこで本研究は、近代英語期における近接未来表現というカテゴリーの創発という新たな観点から、英語未来表現の史的発達を捉え直すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、近代英語期における近接未来表現カテゴリーの出現について、個別表現の用法や、それぞれの表現間の関係を明らかにすることを目的とした。具体的には、ひとつは表現の置き換えである。ほぼ同一の文脈で用いられる場合に、用いられる未来表現がどのように置き換えられていくかを探ることである。もうひとつは、テキストジャンルによる差違である。文体・文脈により生じる差異 (表現置換の時期やペース、用いられやすい表現の違いなど) を明らかにし、近接未来表現群の創発を立体的に描き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は実証的立場から行うものである。対象とする近接未来表現は、現代英語に残るものに加え、近代英語期を扱った先行研究に言及のある表現を対象とした。

用例収集には、電子版 OED の引用文、初期近代期を代表する作家・テキストの各種コンコーダンス、EEBO (Early English Books Online) コーパスを用いた。得られた用例を、用法や形式で比較し、近代英語期に使用された近接未来表現の実態に迫った。

4. 研究成果

まず、当初の計画では予定していなかった内容であるが、未来表現の発達を論じる際に、未来を指す時間節における動詞の形態という問題は重要であるため、それを規範文法に見られる言説との関連を念頭に置きながら、電子版 OED の 17-18 世紀の引用文をコーパスとして、そこから得られたデータを使用して調査した (学会発表)。電子版 OED から before, till, until (節内の動詞は直説法と仮定法の両方が可能) を含む文を抽出し、3 人称単数現在形が用いられる環境を対象に、動詞の形態を集計した。その結果、仮定法現在から直説法現在へ移行するという英語史の大きな流れの中で、これらの時間節では、それが 18 世紀終わり頃に生じたことが明らかになった。その理由として when や after など直説法現在が用いられる環境からの類推や、直説法・仮定法それぞれで用いられる動詞のタイプ頻度の増減の影響を指摘した。加えて、18-19 世紀における仮定法の使用と規範文法との関係はよく指摘されるが、この問題に関しては、規範文法家の言説は統一を見ておらず、OED からのデータと比較してもその影響はそれほど見られないことを指摘した。

ついで、当初の計画に基づく成果である。現代英語において、近接未来は be going to や be about to など幾つかの迂言的定型表現で示されるのが基本であるが、初期近代英語では、その表現形式は今ほどには限定されておらず、現代では廃用、あるいは稀な形式も使用されていた。そのため、特に初期近代英語に的を絞って調査を行うことが必要であると考え、以下の研究成果を得た。まず、William Shakespeare、『欽定訳聖書』、Christopher Marlowe、Thomas Nashe、John Lyly を対象にし、初期近代英語のテキストにおける近接未来を指す各表現 (be about to, be going to, be on the point of, be ready to, go near to) の競合関係を探った (学会発表)。これらの表現のうち、文法化した定型表現として後代まで残ったものと残らなかったものの差異について検討した。使用頻度の多寡だけではなく、それぞれの表現のもつ意味的・形式的な安定性も、その表現が生き残るかどうかを左右した可能性を示した。研究目的で述べたジャンル間による差違に関連して、作家・テキスト間での違いを、限定的にはあるが、明らかにした。調査範囲内では、be on the point of は Shakespeare と『欽定訳聖書』に偏ること、明らかに近接未来用法と見なせる be ready to の用法は、その割合が作家・テキストの間でかなりばらつきがあること (Marlowe: 0% ~ 『欽定訳聖書』: 50%) が判明した。

この内容を手がかりに、EEBO コーパスから集めたデータを用い、より大規模な調査を試みた (学会発表)。先行研究に挙げられている表現の中から、be about to, be upon the point of, be ready to に着目し、前者 2 つが文法化した表現として残ったのに対し、最後がそうならな

かった背景を調査した。Be about to と be upon the point of に関しては、意味的にも形式的にも近接未来を指す表現として安定していた（あるいは順調に発達していた）が、be ready to には、ready の形容詞的用法が時代を通じて色濃く残っていた。この違いが、両者の命運を分けた可能性を提示した。用例収集を通じ、初期近代における be ready to の用法について、さらに興味深い事実の一端も明らかになった。現代英語では、近接未来表現としての用法はマイナーなものであるが、初期近代英語では、その用法がそれなりに広く定着していたことをうかがわせる用例が多く見つかった。たとえば、文脈内に並列されているラテン語との比較でそれが明らかな、以下のような用例がある。

- (1) prae dolore moriturus ...: and ready to dye for grieffe (1621)
- (2) in articulo mortis, ready to dye (1663)

このようなデータは、現代には残らなかった用法や表現について詳細な調査を進めることで、本研究課題に関して、より包括的な知見を得られる可能性を示唆している。加えて、このような外国語の英訳に用いられる表現の変遷は、研究目的で述べた、同一文脈内での表現の置き換えを探る点で重要な情報源となる。本研究では、これらの点までカバーすることができなかったため、今後の研究で進めたい。

また、個々の近接未来表現内における異形態の関係について、be on the point of doing に着目した研究を行った（学会発表 および雑誌論文）。この表現はフランス語 être sur le point de からの翻訳借用であるとされているが、初期近代英語では、複数の異形態が存在していた（引用文献）。そのような異形態間について、EEBO コーパスを用いて調査した。その結果、16世紀初頭までは in point to do、16世紀は at the point to do、17世紀からは upon the point of doing と、時代ごとに代表的な形が入れ替わることが明らかになった。17世紀以降 of doing で終わる形式が定着した背景には、複合前置詞の拡大が関わっている可能性を提示した。つまり、upon the point of doing は複合前置詞と同様に「前置詞＋（冠詞）名詞＋前置詞」の形式を持つため、近代英語期を通じた複合前置詞の興隆とともに定着し、代表形として一般化したと考えられる。

< 引用文献 >

- Fries, Charles C. (1925) "The Periphrastic Future with Shall and Will in Modern English," *Publications of the Modern Language Association* 40, 963-1024.
- Danchev, Andrei and Merja Kytö (1994) "The Construction Be Going To + Infinitive in Early Modern English," Dieter Kastovsky, ed., *Studies in Early Modern English*, Mouton de Gruyter, Berlin, 59-77.
- Nesselhauf, Nadja (2010) "The Development of Future Time Expressions in Late Modern English: Redistribution of Forms or Change in Discourse?," *English Language and Linguistics* 14, 163-186.
- Watanabe, Takuto (2011) "On the Development of the Immediate Future Use of *Be About To* in the History of English with Special Reference to Late Modern English," *English Linguistics* 28, 56-90.
- Höche, Silke (2011) "*I Am About To Die* vs. *I Am Going To Die*: A Usage-based Comparison between Two Future-indicating Constructions," Doris Schönefeld, ed., *Converging Evidence: Methodological and Theoretical Issues for Linguistic Research*, John Benjamins, Amsterdam, 115-142.
- Potter, Simeon (1950) "Review: *Studies of the English Verb from Chaucer to Shakespeare with Special Reference to the Late Sixteenth Century* by George Fridén", *The Modern Language Review* 45, 77-78.
- Mossé, Fernand (1938) *Histoire de la forme périphrastique être + participe présent en germanique*, C. Klincksieck, Paris.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

Watanabe, Takuto, Be on the Point of -ing and Its Variant Forms in Early Modern English, *JELS*, 査読なし, 36, 2019年, pp. 302-307

[学会発表](計4件)

Watanabe, Takuto, Immediate future expressions in Early Modern English: the rivalry between be about to, be upon the point of, and be ready to, 2018年, 20th International Conference on English Historical Linguistics (Edinburgh University)

Watanabe, Takuto, Be on the point of -ing and its variant forms in Early Modern English, 2018年, ELSJ 11th International Spring Forum 2018 (北海道大学)

渡辺拓人, 初期近代英語における近接未来表現の消長 (シンポジウム: 英語史における定型表現), 2017年, 日本英語学会第35回大会 (東北大学)

Watanabe, Takuto, The Development of the Simple Present Tense in Adverbial Time Clauses in Modern English, 2016 年、Kyoto Postgraduate Conference on English Historical Linguistics (京都大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。